



Rotary 読本

ロータリーを
知るために

奉仕の理念とは？

職業奉仕って何？

奉仕って
団体活動？ 個人活動？

ロータリーの目指すところ？

『四つのテスト』を實踐する

ロータリーとライオンズ

ロータリーのある風景

ポールハリス氏像

米山梅吉翁像

ロータリーを知るうえで、知らなくてはならないものがあるとすると、それはロータリーが生まれたアメリカ合衆国という国が、当時どういところで、その当時の国民は何を考えていたのかということではないだろうか。

アメリカ建国の精神

自由を求めてイギリスからピルグリム・ファーザーズと呼ばれる人々が新大陸にやって来た。彼らの子孫たちが、その後1776年7月4日にアメリカ合衆国を建国した。アメリカ合衆国は「自由」と「民主主義」を建国の精神としている。

本来、独立時に求めていた自由とは束縛者からの解放であり、そのためには、生命を賭けても惜しくない。それが独立時の概念としての自由です。その後、自由と言われる概念には、宗教・思想などを含む個人主義も含まれるようになる。政治の個人への介入を妨げ、個人の経済活動と安全を保証する概念へと変遷した。

独立当時のアメリカ大陸は広大な未開拓の大地であり、自由や経済的利益を求めた個人主義的活動は他者との衝突を生じることなく追求することが可能であった。その結果、個人の利益を追求し続け、社会の利益や福祉ということが省みられることなく、アメリカは成長を続けた。他人に迷惑さえかけなければ何をしても良い、そのように自由を理解した。そのような中、19世紀になる前には、個人の利益の追求は近いうちに必ず社会の要求と衝突するだろうと多くの人々が注意を促し始めた。19世紀、西部開拓時代には、個人の利益の追求の結果として、原住民であるアメリカン・インディアンを迫害し続けているが、この事実は社会的対立とは見なされなかった。広大な土地を開拓し続け、インディアンの居住区を制圧し、人々の入植が西海岸まで到達するようになると、持つものと持たざる者の経済格差は次第に大きくなり始める。特に、ロータリーの生まれたシカゴはギャングスターによる裏社会に代表されるように、悪と腐敗の臭いのする街へと変貌してしまっていた。利益を追求するためには、他人を騙すことさえ厭わない、そのような風潮が蔓延していた。20世紀になって生まれた「利己」と「利他」の調和を目指すロータリーの思想は、そんなアメリカのシカゴだからこそ生まれたのであろう。

もうひとつの建国の精神である民主主義については、ロータリーの定款や細則の規定を読めば理解できるであろう。ロータリーの運営は確かに民主主義に則り運営されている。すべての会員は同等・対等であり、クラブの運営にあたるのは選任された会長や理事であり、すべての決定は理事会においておこなわれている。

ロータリークラブの誕生

1905年2月23日、シカゴで第1回目の会合が以下の4名で開かれた。会員が順番に各自の事務所で集会を開いたことから「ロータリー」と名付けられた。

設立時のメンバー



左から
ガスタヴァス・ローア(鉱山技師)
シルヴェスター・シール(石炭商)
ハイラム・ショーレー(洋反物商)
ポール・ハリス(弁護士)

●設立時の目的

真の友人をつくりたい(親睦)→会員間の相互扶助による事業の発展(互惠)

- ・ 職業人の親睦和合を達成するために、「一業一会員制」とする

設立当初のロータリークラブは、会員間でお互いに仕事を廻し合ひましよう、「親睦と互惠」を目的とした集まりであった。その後、ただの「親睦と互惠」だけの集まりでは将来がないと、「奉仕」という理念がロータリーに持ち込まれた。

シカゴ・ロータリークラブの最初の綱領(1906年)

第1条: 会員の職業上の利益を振興すること

(互惠→職業奉仕へと発展)

第2条: 性質として社交クラブに伴う親睦、その他の望ましい諸点を振興すること

(親睦→クラブ奉仕へと発展)

→→ 第1条、第2条だけでは、中小企業経営者のエゴイスティクな相互扶助組合にすぎないという点と、活動の社会的意義に欠けるという点から、後日、第3条を追加

第3条: シカゴ市の最善の利益を推進し、その市民に市に対する誇りと忠義の精神を普及せしめること(→社会奉仕)

ロータリーの最初の奉仕活動は何だったのであろうか。ほとんどの会員が入会時やその後にロータリー初めての奉仕活動は、1907年に始めた公衆便所の設置運動であると聞いていないであろうか。ではこれは真実か。『奉仕の一世紀』(2008年)には以下の記述がある。

第3条の綱領が追加されて数ヶ月間は、言葉を裏付ける行動は何もなかった。それから1907年になり、ロータリアン、クラークW.ホーリーが、シカゴから48キロ離れたイリノイ州のジョリエットの近くに住む説教師についてクラブ例会で話した。この説教師の馬が死んだのだが、彼は非常に貧しく馬を買い換えることができないため、田舎の教会や教区民の間を巡ることができなくなっていた。クラブはこれに素早く対応して、2週間のうちに説教師に新しい馬を買った。この単純で自発的な行為が、ロータリアンが最初に行った社会奉仕であった。(下線引用者)

しかし、ロータリーの先人たちはこの事実を寄付行為として記録のみに残し、最初の奉仕活動としては語り継がなかった。ロータリーの歴史の中で、先人たちの残した意志「単なる寄付行為はロータリーの考える奉仕活動ではない」というメッセージをここに感じ取ることができる。

この寄付の数週間後に始まるのが、公衆便所の設置運動である。実際に設置が終わるまでには3年の歳月がかかっている。ロータリアン一人ひとりが行動し、行政に陳情することから始めるが、様々な反対要素を取

り除かなければならなかった。どのような反対があったのか。例えば、近くにあるデパートなどではトイレを利用する人が買い物をする事から、街の人々がデパートのトイレを利用しなくなると、店の売上減につながると反対した。この公衆便所の設置運動が自分たちが行動し、実践するというロータリアンの最初の活動である。先人たちは、この運動をしてこそロータリーの最初の奉仕と認めたのである。



最初の社会奉仕(公衆便所設置運動:1907年、シカゴ)

しかしながら、まだ疑問は残る。この最初の奉仕活動は、どう考えても今でいうところの「社会奉仕」である。いったい、いつどのようにしてロータリーの奉仕の根幹は「社会奉仕」から「職業奉仕」へと変わったのであろうか(そして2021年現在は、再び「社会奉仕」)。1908年、後に「ロータリーの奉仕の理念の提唱者」と呼ばれることとなるアーサー・フレデリック・シェルドンが入会する。この時期には、ロータリーに職業上の恩恵を求めて入会してきた会員も大勢いる。そのような中で地域社会への奉仕活動が始まり、自分の入会の目的(親睦、相互扶助)とは違うと違和感を抱いた会員も多々いたであろう。ロータリーの奉仕とは、一体どうあるべきか、その考えを明らかにする必要性が生まれた。

ロータリーはその答えを、シェルドンの経営学に由来する考えに求めた。つまり「職業は、それ自体が社会への貢献であり、奉仕である」という考え方である。これにより、地域(社会)奉仕的な奉仕活動とは別に、職業人であるロータリアンは、個人として、その職業で社会に貢献、奉仕していると言える(職業奉仕)。

職業上の互惠を求めて入会した者、地域(社会)に奉仕することが大切と考えて入会した者、どちらをも納得させうる理念の誕生である。

シカゴ・ロータリークラブの特徴(設立当初)

1. 一業一会員制
2. 政治上、宗教上の論争及び、それに関わる団体行動の禁止
3. ファーストネーム(名前)で呼び合う
4. 例会で歌を合唱する(社会奉仕の考え方が異なる会員間の雰囲気と和ませるために始める)
5. 理事、役員任期を一年とする
6. 会員相互の職業上の扶助(職業上の様々な問題を語り合う)
7. 会員は職業上で知りえた知識・情報を他の会員に話す(→卓話)
8. 出席は会員の義務(4回連続して休むと会員資格を失う)
9. 会合の時間厳守
10. 会員名簿に写真を入れる(退会した人も記憶に残すことができる)
11. 食事を共にする

シカゴで始まったロータリークラブであるが、1908年にサンフランシスコで、2つ目のクラブが創設され、1910年までに全米各地で16のクラブが創設された。そしてその年「全米ロータリークラブ連合会」を発足し、各クラブ共通の目標や規範を定めることとし、8月に初めての全国大会を開催した。全米ロータリークラブ連合会は、クラブの設立が世界各国に広がり始めたことをうけ、1912年に「国際ロータリークラブ連合会」と名前を変え、1922年に現在の「国際ロータリー」へと改称された。

●ロータリー財団の発足

1917年、アーチ・クランフ 国際ロータリー 第6代会長は、アトランタ国際大会で「全世界的な規模で、慈善、教育、その他、社会奉仕の分野で、何か良いことをしよう」と基金の設立を提唱した。翌年、これに応じてカンサスシテイRCが、国際大会の余剰金26ドル50セントを基金に寄付する。これがロータリー財団の発足の契機となった最初の寄付金である。その後、1928年、この基金が「ロータリー財団」と名付けられ、現在に至っている。正式名称は「国際ロータリー



のロータリー財団」という。1929年、国際障害児協会に500ドルの小切手を贈った。これがロータリー財団の最初の奉仕事業となった。

1947年、ロータリー創設者のポール・ハリスが亡くなると、多くの人々から国際ロータリーに寄付が寄せられた。この寄付は「ポール・ハリス記念基金」となり、その後のロータリー財団の発展のために役立てられた。26ドル50セントの寄付から始まったロータリー財団は、現在では年間4.5億ドル以上(2019-20年度実績4.86億ドル)の寄付を受けるほどの大きな財団に成長した。財団はこうして多くの方々の善意の寄付金に支えられ、人道的分野や教育面での支援活動を続けている。

ロータリー財団の活動は多岐にわたるが、財団への寄付は、主に7つの重点分野に使われている。

- ・平和と紛争予防/紛争解決
- ・疾病予防と治療
- ・水と衛生設備
- ・母子の健康
- ・基本的教育と識字率向上
- ・経済と地域社会の発展
- ・環境の保護

特に、ロータリー財団はポリオの地上からの根絶を大きな課題として長年にわたり取り組んでいる。

また、我々のロータリー財団への寄付は、その一部を自分たちが企画・実践する奉仕プロジェクトのために利用することができる。

ロータリークラブの特色

●奉仕の理念*

ロータリークラブは、そのクラブの所在地域内、もしくはその周辺地域に事業所または住居がある善良なる職業人を会員とする職業奉仕団体である、と定義できる。ロータリークラブが職業奉仕団体と定義される所以は、『ロータリーの目的』(1935年採択、2013年日本語訳を『ロータリーの綱領』から『ロータリーの目的』に変更)にある。そこには、「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある」とある。この言葉の意味するところは何かなのであろうか。

まず、「意義ある事業の基礎」となると書かれている「奉仕の理念」(Ideal of Service)とは一体何を意味

するのか。「奉仕の理念」という言葉は、『手続要覧』や『ロータリー章典』で、それこそ幾度となく言及されるが、これらには、厳密な意味で、その定義は記載されていない。決議23-34 第1条をその定義とする解説は多々見受けられる。しかし、この第1条を何度読んでみても、厳密な意味で「奉仕の理念」という言葉を定義しているとは読めない。その定義の記述を探し求めると、国際ロータリー初代事務総長、チェスレー・ペリーの言葉である「それは他人のことを思いやり、他人のために尽くすことである (thoughtfulness of and helpfulness to others)」に行き着く。つまり、「ロータリーの目的」でいう「奉仕の理念」とは「他人への思いやりと助け合い」であると理解できる。



* 2013年、日本語訳変更「奉仕の理想」→「奉仕の理念」

●職業奉仕団体

「奉仕の理念」を「他人への思いやりと助け合い」と理解すると、すなわち『ロータリーの目的』は次のように解釈することができる。それは「**会社の基盤を支える基本姿勢として『他人への思いやりと助け合い』の気持ちを定着させ、その気持ちを力強く育てあげる**」ということである。

事業(職業)は利益に重大な関心を払いながら活動する。その利益はどうすれば得られるのか。社会のニーズ、経営姿勢など色々な要素が考えられるが、一番大切なのは他人への思いやりと助け合いである。それが深い信用・信頼を生み、その信用・信頼関係が最終的な報酬として物質的な利益につながる。

「奉仕の理念」の実践こそが優れた報酬に値し、事業(職業)を繁栄に導く。この考えが根底にあるがゆえに、ロータリーは職業奉仕団体だと定義される。

●親睦と奉仕のロータリーライフ

ロータリー設立当初は、「親睦」とは会員相互の互惠を目的としたものであった。今、ロータリーでいう「親睦」には次のような意味合いがある。ロータリーの仲間が定期的(基本は週1回)に集まり、お互いが心を通わせながら、忙しい日常の仕事から離れて、自分を見

つめるために、「奉仕の理念」についての研鑽を積み、お互いの事業上の発想の交換を行い、自己変革を図っていく。そして、自己研鑽を積み自己変革をした、その自分を人の為に役立てることが「奉仕」である。この「親睦」と「奉仕」の繰り返しがロータリーライフである。

例会に出席しているだけでは研鑽を積むことはできないし、自己変革もできない。例会を自分を見つめ直す場として、奉仕、特に職業奉仕について日々取り組むことが研鑽であり、その研鑽を続けていくことが自己変革に繋がっていくのである。

ロータリー思想の発展

●ロータリーの奉仕哲学

ロータリーの奉仕哲学とその実践理論は、1923年の国際大会で議決された決議* 23-34 第1条によって確立された。

* 決議とは:国際ロータリーの組織規定に矛盾することなく、国際ロータリー理事会にその意見を表明・具申する議決行為

決議23-34 第1条:ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕、すなわち「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

この第1条は、表現が難しいので、次のように言い換えると理解しやすいだろう。

人間は、「自分が良ければよい」という利己的な感情と「他人の為に何かなくては」という利他的な感情を持っている。そして、この二つの相反する感情の間で常に葛藤している。この葛藤を和らげ、調和してくれるのがロータリーである。何故ならば、ロータリーは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」、つまり他人の為にすることが自分の為になると信じ、「超我の奉仕」の理念で活動するからである。

しかし、この第1条にある「哲学」という言葉がロータリーの理解を難しくしてしまったのも事実である。「哲学」とは、個人・人間・世界を俯瞰したところで普遍的

な価値観や思考様式を追求する学問であり、芸術や文学と同じで、本来答えが出せる学問ではない。この「哲学」において大切なのはその追求プロセスである。したがって、これしかないという正解はない。それゆえ、ロータリーを考えれば考えるほど、多種多様な思考や理念が生まれてくる。そういう必然性がロータリーにはある。

●第1標語と第2標語

1950年にロータリーの正式な標語として認定された「超我の奉仕」と「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」であるが、その後1989年に「超我の奉仕」が第1標語に、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」が第2標語として「ロータリアンの職業宣言」で採択されることになる。

第1標語(奉仕哲学):

Service Above Self

(1920年頃、提唱者不明)

← Service Not Self(1911年)

(奉仕だ、自己ではない)

by フランク・コリンズ



第2標語(実践理論の原則)

One Profits Most Who Serves Best

(2010年7月1日より)

← He Profits Most Who

Serves His Fellows Best.

(1910年)

← He Profits Most Who

Serves Best. (1911年)

by アーサー・フレデリック・

シェルドン



本来は、第2標語が先に提唱され、職業奉仕の理念を説明したものであった。後から提唱されたService Not Selfは、同じ職業奉仕の理念を別の言い回しで表現した言葉と解釈されていた。しかしながら、Service Not SelfはService Above Selfと表現されるようになり、ロータリーの長い歴史の中で、違う意味で理解されるようになっていった。

ロータリーの奉仕理念は、職業奉仕(「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という職業倫理観に基づく

「超我の奉仕」)から社会奉仕(「他人のことを思いやり、他人のために尽くす」という人道的奉仕活動を指す「超我の奉仕」)に変わっていつているように見受けられることが多々ある。これは「超我の奉仕」(Service Above Self)が「奉仕の理念」(他人への思いやりと助け合い:thoughtfulness of and helpfulness to others)と非常に近い、もしくは同じような意味で解釈できるからであろう。

●職業奉仕(その理念の変遷)

売買関係、下請関係、同業関係、雇用関係と、千差万別な関係の連鎖である職業を「正直」に実践し、他者から搾取せず、犠牲を求めることなく、あらゆる人々から信頼と信用に支えられて生活できるようにする(社会的有益性→職業奉仕)。そして、それが地域社会を明るくすることに通じる(社会奉仕)。

職業奉仕を最も良く表す言葉(第2標語):

1910年:

He Profits Most Who Serves His Fellows Best.

「仲間に最も奉仕する者に、最大の利益あり」

1911年以降:

He (One) Profits Most Who Serves Best.

「奉仕に徹する者に最大の利益あり」

→ 顧客の立場を尊重する(仲間に奉仕する)ことが、最終的には最大の利益を生む(Profits)ことに通じる。

しかしながら、「Profits(利益)」という単語の解釈が、この第2標語の意味合いを変えてきている。「Profits=利益」と解釈すると、あまりにも世俗的かつ物質的過ぎるといふ異論が起り、「Profitとは商品の生産価格と販売価格から生ずる利潤というような近視眼的なものをいうのではなく、精神的報酬に主眼をおく」と解釈されるようになった。

この第2標語「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」と言う日本語訳からも「利益(Profits)」という単語が消えてしまい、「物質的・金銭的な利益」を否定してしまったかのように思える。その結果、第1標語(「超我の奉仕:利己を超越して、他人のことを思いやり、他人のために尽くす」)の意味に近づき、本来の職業奉仕よりも社会奉仕的な意味合いにとられがちになってきている。

この言葉を述べたアーサー・フレデリック・シェル

ドンは、『ロータリー哲学』という自身の論文の中で「Profits」を「物質的な富」と「精神的な報酬」として言及している。この論文の中で「物質的な富」は否定されているどころか、ロータリーは「財産権の擁護者」であると、はっきりと肯定されている。実際には第2標語は「物質的な富」に主眼を置いた言葉とも言える。しかし、それは結果としての「物質的・金銭的利益」であり、それを目的とすることは間違っていると、これもまた、はっきりと述べられている。

本来の意味として、「最もよく奉仕する」とは？

その職業において、尽力することを意味する。

- ・ 製造業の場合は「これ以上の良いものは造れない」という気持ちで、
- ・ サービス業の場合は「これ以上のサービスはできない」という気持ちで、
- ・ 医師の場合は「患者さんのために現時点で最善の医療を施す」という気持ちで、

職業に尽力することが、最も(物質的及び精神的)報酬を生む。

儒教の影響もあり、清貧(清く、貧しく)を美德と考えがちな日本人は、「Profits=利益」という解釈に否定的になりやすく、精神的な報酬と解釈しがちである。しかし、この精神的側面を強調しすぎた考えは、アーサー・フレデリック・シェルドン自身がニューヨークのローチェスターで開催された集会の講演で否定している。

ロータリーが職業人の集まりである限り、利益を否定することはあり得ないことであり、現在、我々は「He (One) Profits Most Who Serves Best.」を以下のように理解できるであろう。

- ・ 顧客が求めている良い仕事をした結果として利益が生まれる。
- ・ 利益を上げるための経営か、顧客のための経営か？ 後者が最終的にはより利益を生む。
- ・ 人間は目先の利益に目がくらみがちだが、正しい考え方を通すことが大切である。利益はその考えや、その考えに基づいた行為が正しかったかどうかの判定基準であり、顧客第一で活動した結果の報酬である。

つまり、ロータリーの奉仕哲学は、継続的に利益を得るための職業を生業とする基本的な人間関係の原則であると言える。

その時代に、ロータリーと接触があったとは思えない、日本の実業界の創設者と呼べる渋沢栄一は、その著書『論語と算盤』(1917年初版発行)の中で、奇しくも次のように述べている。参考までに引用しておく。

第一の根本たる道理なるものは、必ず生産と一致するものである。しかして富をなす方法は、第一に公益を旨とし、人を虐げるとか人に害を与えとかあるいは偽りなどということのない様にしなければならぬ。かくて各々その職に従って尽くすべきを尽くし、道理を誤らず富を増して行くことであれば、如何に発展して行っても、他と相侵すとか相害することは起こらぬと思う。神聖なる富はかくて初めて得られ続けられるのである。各人各業がこの域に達すれば、そこで廓清は遂げられたのである。

●社会奉仕(その理念の変遷)

職業奉仕を念頭におく社会奉仕の概念:

前のページで職業奉仕を次のように説明した。

売買関係、下請関係、同業関係、雇用関係と、千差万別な関係の連鎖である職業を「正直」に実践し、他者から搾取せず、犠牲を求めることなく、あらゆる人々が信頼と信用に支えられて生活できるようにする(職業奉仕)。そして、それが地域社会を明るくすることに通じる(社会奉仕)。

つまり、「職業奉仕」の本質的な実践は各ロータリアンの「個人的」奉仕を通じて行われるものであり、この「個人的」奉仕により地域社会の一部でも明るくなれば、それが「社会奉仕」の契機となる。

→個人的奉仕活動(親睦・互惠派)

一方、事業(職業)で上げた利益を社会に還元し、世間一般が要求する社会福祉事業も「団体」奉仕として手がけようとする奉仕活動の拡大意見を持つ会員・クラブも多く現れてきた。

→団体的奉仕活動(奉仕・拡大派)

その後、身体障害児に対する関心(決議22-17、決議23-8)で大きく意見が分かれた。各クラブの自治権の問題にも発展、奉仕のあり方をめぐる混乱が続く。

親睦・互惠(理論)派:職業倫理の高揚、理念提唱、自己改善、個人奉仕

奉仕・拡大(実践)派:人道的活動、金銭的奉仕、実践活動、団体奉仕

実際に当時そのような派閥が実在し、派閥争いがあったという事実はないが、後世のロータリアンが当時のロータリアンたちの考え方の違いを便宜上そのように分けた。

決議23-8「国際身体障害児協会の仕事をロータリーが代行し、その費用を援助するためにRI中央事務局が年間1ドルの特別人頭分担金を徴収すること」

決議23-8は否決され、決議23-34が採択される。

決議23-34 第2条

1. 奉仕の理論を団体で学ぶ
2. 地域社会に対して奉仕の実例を団体で示す
3. 奉仕の理論を会員個人がそれぞれの職業および日常生活において実践に移す
4. 個人として、また団体としても、その実例を示すことによって、一般の人々にも、理論的にも実践的にも、奉仕の理念を受け入れてもらえるよう努力する

決議23-34 第2条により、団体的社会奉仕と個人的社会奉仕の両方の重要性が認められた。ただし、ロータリークラブでの「団体的」な社会奉仕活動は、クラブ会員に対して協力を呼びかけ実践すべき性格のものであり、この意味において、これは会員の個人的な奉仕活動と見なすことができる。

ロータリーは『ロータリーの目的』にもあるとおり、本来「職業奉仕団体」であり、各ロータリアンの倫理向上を通じての「職業奉仕活動」が、やがて「社会奉仕活動」へと発展していったのであるから、「団体奉仕」よりも、むしろ「個人奉仕」の方が、ロータリーの精神にそっているとと言える。また、ロータリークラブでの「団体的」な社会奉仕活動は、その会員に「個人的」な奉仕活動を勉強してもらうための授業であると位置づけられる(決議23-24 第6条)。これは、決して「団体的奉仕」を否定するものではない。事実、インターアクト、ローターアクトをクラブとして指導・監督する青少年奉仕などは一種の「団体的奉仕」の良い実例である。決議23-34には、この他にも第3条から第6条まであり、国際ロータリーの役割、クラブの団体行動の在り方、クラブの絶対的自治権、奉仕活動の選択と実践方法などに言及している。

あまり語られることはないが、この決議23-34は2007年に『手続要覧』などのロータリーの重要文献から削除されることが提案された。決議23-34は、社会奉仕の理念ならびに国際ロータリーと各クラブの原理を

正確に記すものではなく、むしろ国際ロータリーの推進するポリオ・プラス・プログラムの障害となるという理由からである。結果、2008年に決議23-34は「歴史的文章」として「歴史的価値」のみを残すものと決定された。つまり、今後はまったく価値のない文章ということであった。しかし、この決定に反発するロータリアンは多く(特に日本や韓国など)、2010年に「歴史的文章」の「歴史的」という言葉が削除された。これにより決議23-34は、現在も効力のある文章であり、ロータリーの神髄を記述した文章であることが再度認められたのである。

ロータリーの5大奉仕

地球上には様々な環境に、それぞれ異なる歴史と文化を持つ人々が生活している。これら数十億の人間が共に幸福に生きていくためには、「奉仕の理念(他人への思いやりと助け合い)」が不可欠であり、それは理想的な人間関係と世界平和を保つ上での重要な条件である。そう信じて、ロータリーでは「奉仕の理念」を個人生活、事業生活および社会生活の中で、行動で示すという心がけを常に持ち続けることを提唱している。社会生活における人間の幸福は、他人への思いやりと助け合いにあるとするロータリーは「クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、青少年奉仕」の5部門を設け、各自の職業を通じて「奉仕の理念」を推進することを目的としている。

1927年、オステンド(ベルギー)国際大会において、4大奉仕部門として「クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕」を採択した。この時に初めてロータリーは奉仕活動を区別し、それぞれの方向性を示した。しかし、この新しい方向性は、これまでの奉仕理念、つまり職業奉仕を基幹としていた活動とは異なった活動をしていくことをも意味していた。

その後、2010年、若者を対象とした奉仕活動を「青少年奉仕(当初は新世代奉仕と呼称)」とすることを採択し、5つ目の奉仕活動部門が誕生した。

●奉仕活動

現在のロータリーには、以上のように5つの奉仕活動部門がある。この5つの奉仕活動が、各ロータリークラブの活動の実践的な規準となる。

クラブ奉仕:クラブの質を向上させるために各会員が取るべき行動をいう。クラブ奉仕活動として、各会員は、例会に出席する、クラブの親睦行事に加わる、クラブの奉仕活動に参加する、理事や委員を務めることなどを期待されている。また、クラブ外の活動として、地区研修・協議会、地区大会、IMなどに出席することも必要とされる。

職業奉仕:ロータリーの特徴をよく表す奉仕活動。職業倫理を高める内なる奉仕(自己研鑽)と、自己の職業を他者(お客様、従業員、協力会社)へ還元する外への奉仕があると考えると理解しやすい。内への奉仕とはわかりやすく言えば、「ロータリーで学んだことを自分の職業に活かす」ということであり、外への奉仕を一言でいうと「職業倫理を高め、一生懸命に仕事をして、自分の会社を存続させる」ということである。そうすることが、お客様、従業員、協力会社の方、社会の為になる(奉仕できる)。職業奉仕として奉仕することは、企業の利益の追求を否定しているものではない。神奈川が生んだ日本を代表する江戸末期の偉人・二宮尊徳は以下のように道徳(倫理)と経済(職業)の関係を語っている。「経済を伴わない道徳は戯言であり、道徳を伴わない経済は罪悪である」と。

社会奉仕:クラブの所在地域または行政区域内に居住する人々の生活の質を高めるために行う奉仕活動。「明るい地域社会の創造」を目指す。災害時にはクラブ内で義援金なども集める。歴史的には、団体奉仕か個人奉仕かなど、様々な議論が闘わされ現在の社会奉仕理念となっている。

国際奉仕:他国の人々を助けることを目的とした奉仕活動。会員の国際理解、親善、世界平和を推進する目的もある。第一次世界大戦がもたらした大きな荒廃、不幸は、世界の人に「二度と同じようなことを繰り返さない」という願いをもたらした。そして、国境を超えた奉仕活動が戦争を防止し、国際親善のために有意義なものたりうるということで国際奉仕の概念が生まれた。残念ながら、我々はその後第二次世界大戦を経験することになってしまった。21世紀の現在も、戦争はまだこの世界から消えることなく、各地で多くの命が失われ続けている。

日本独自の**米山記念奨学金事業**も、ひとつの国際奉仕活動である。これは日本のロータリーの創始者である米山梅吉氏の偉業を後世に残したいと東京ロータ

リークラブが始めた活動である。今では全国のロータリアンからの寄付金を財源として、日本で学ぶ大勢の留学生に奨学金を支給し、支援する国際奨学事業となっている。その目的は、日本と世界とを結ぶ「懸け橋」となって国際社会で将来活躍し、ロータリー運動の良き理解者となる人材を育成することにある。これは、ロータリーの目指す「**平和と国際理解の推進**」そのものである。

青少年奉仕:次世代を担う若人たちを様々な面で応援・育成する活動。2011-2012年度から新世代奉仕として4大奉仕部門に加えられた5番目の奉仕部門、翌年「青少年奉仕」と呼称が変わった。

ロータリーの青少年に対する関心は、ロータリー創設当初からあった。1913年頃より各クラブにおいて、障害を持つ子供たちへの関心が高まり、このような障害を持つ子供たちへの奉仕を主要な社会奉仕プロジェクトとして活動するクラブが増えた。決議23-34の採択には、この障害を持った子供たちへの奉仕のあり方に対する各クラブの考え方の違いが背景にある。このような中で、国際ロータリーは、1924年に全国青少年活動委員会を設立した。「青少年を良き市民、立派な職業人に育てる;すべての青少年に潜在能力を完全に引き出す機会を与える、そして職業訓練を奨励する」という青少年活動の目標が設定された。当初は青少年奉仕は4大奉仕部門の奉仕対象者を青少年に限定したプロジェクトであると考えられていた。

青少年を対象とするロータリー活動は全奉仕部門にまたがっている。クラブがボーイスカウトを組織したり、障害児を遠足や旅行に連れ出したりすれば、社会奉仕と呼ぶことができる。10代の少年に仕事の技能を個人的に指導したり、身体障害を持つ青少年に手作業を指導したりするのは職業奉仕である。他国の子供を援助したり、青少年交換学生を受け入れたりするロータリアンは、国際奉仕を行ったことになる。(『奉仕の一世紀』)

現在は、青少年奉仕活動として各ロータリークラブは、奉仕の精神と国際理解を青少年に付与するため青少年奉仕活動プログラムであるインターアクトクラブ(12~18歳)とローターアクトクラブ(18歳~)を提唱し、設立できる。提唱クラブは両アクトクラブに対して指導・助言・監督の責任を持つ。

世界で初めてのインターアクトクラブは米国メルボー

ンの高校で1962年に、ローターアクトクラブは1968年に米国ノースカロライナで開始された。

また、地区*としては奨学金の支給、交換学生の派遣や受け入れ、青少年指導者養成セミナー(RYLA)の開催などを通して青少年の育成に努力している。

* 日本は34地区に分割されている。各クラブはいずれかの地区に属している。ただし、地区は各クラブを統括するが管理はせず、各クラブは完全なる自治権を有する。

再考：職業奉仕

本編では、職業奉仕はロータリーの奉仕の理念の提唱者であるアーサー・フレデリック・シェルドンの理念を基盤として築かれた理念を中心に説明してきた。

1915年に採択された「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」(別名「ロータリー道德律」)の第2条には「自己改善を図り、実力を培い、奉仕を広げること。それによって、『最もよく奉仕する者、最も多く報いられる』というロータリーの基本原則を実証すること」とある。しかし、アーサー・フレデリック・シェルドンが退会後の1931年、このシェルドンの言葉がある道德律は、その配布を禁止される。その後1951年に道德律は廃止され、1980年道德律はロータリーの公式文章から完全に削除された。このような道德律の評価の変遷にともない、職業奉仕の理論も変っていったのではないだろうか。

また、ロータリーは寛容の精神で、宗教・国籍・社会制度・人種の違いを超越したところに理想を求める運動でもあり、そのことも、職業奉仕に対する他の考え方が生ずる一因になっているのではないだろうか。ここでは、シェルドンの理論を含め、現在のRIの考え方およびその他の考え方も解説する。

1. シェルドン理論(原論)

長期的かつ安定的な利潤獲得のためには、お客様に満足してもらい、お客様の信用を獲得することが大切である。そのためには、勤勉であること・礼儀を重んじることも重要だが、正直であることこそが、最良のビジネスポリシーである。誰からも何も搾取することなく正直に職業を実践できたとき、職業上の利益の追求は、道德と一致する。その道德を守れない者は、市場

によって確実に罰せられる。成功を続ける職業人は賢いだけでなく倫理的である。市場が人を道德化し、職業倫理を向上させるからである。これこそ、職業人による、ロータリーによる、社会貢献であり社会に対する奉仕である。つまり、職業そのものの自体が世界の発展、世界平和に対する奉仕活動であるということになる。

シェルドンは、その考えをエディンバラ国際大会(1921年)におけるスピーチで、靴屋さんを例にとつて説明した。世界中の靴屋さんが、その製造機器とすべての知識をもって、一カ所に集まっているときに、大地震などの天災が発生し、靴に関するすべてのものがなくなってしまうたら、どうなるか。我々は裸足で歩くことになってしまう。つまり、靴屋さんという職業はそれ自体が社会に対するサービスであることがわかるであろう、とそう職業奉仕を説明している。例としては、かなり極端ではあるが、分かりやすい説明である。また、「市場が人を道德化し、道德を守れない者は、市場によって確実に罰せられる」という考え方は、19世紀世中期にチャールズ・ダーウィンやアルフレッド・ウォレスにより体系化された「自然選択(淘汰)説」に通じるところがある。

2. 天職論

ロータリーは職業奉仕をVocational Serviceと呼んでいる。職業に「天職」とも理解されるVocationという単語を使用した。

ロータリーの創設前から、職業を「天職(Vocation)、使命(Calling)」と考える思想は存在した。これは神から呼びかけられていること、求められていること、そこに仕事の意味を見いだす考え方である。キリスト教には予定説という考え方がある。「神は選んだ人のみを救済する。人間の営みには、全く関係なく、それは初めから神の予定で決められている」という考え方である。プロテスタント派のように、この考えを信仰の中心におくと、「自分は神に選ばれている」のかどうか、どうしても心配になってくる。そこで、「神による召喚」という意味のある職業(Vocation=ラテン語「呼ぶ」vocareのvoc+ation)が重要になる。神の呼び出しを受けたということは、自分は選ばれし者である、と信じていることができるからである。神の呼び出しに対して、しっかり応えること(仕事に精を出す)が、救済される証と考えられるからである。

日本人の労働観は、元々から天職説である。天(西洋

の「神」とは異なる)から委託されたもの、それが職業(農業)であり、それによって天に仕えていることになる。18世紀から19世紀、日本特有の「家」の思想とあいまって、職業(家業)を天職と考える思想は家訓などにもよくみられるようになった。このように、日本の場合は天職というのは「天から委任された尊い仕事」という意味での理解のされ方で、キリスト教プロテスタント派が考える「神からの召喚」とは違うが、天職論そのものは、非常に受け入れられやすい考え方である。

3. 倫理向上論

現在のロータリーの職業奉仕の理念である。それは1987年「職業奉仕に関する声明」→1989年「ロータリアンの職業宣言」→2011年「ロータリアンの行動規範」という系譜で明らかにされている。また、この考え方をサポートしているのが「四つのテスト」である。「四つのテスト」を言行の規範とすることにより、職業倫理を高めようという考え方である。アーサー・フレデリック・シェルドンは、真摯に職業に励むことにより、結果として職業倫理は高まると言っているが、現在は職業倫理を高めることを目的としている。

現在のように食品の偽装表示などが、大手ホテルや老舗レストランで発覚し、問題視されている時代にあっては、一番大切なことなのかも知れない。

『ロータリーの基本知識 日本編』(2012年)では、職業奉仕について次のように説明している。

ロータリークラブは、企業経営者、専門職といった職業人の集まりです。会員は、それぞれの職業を代表してクラブに入会します。したがって、会員候補者は、その時点で既にその職業において高い見識と業績を積み上げてきた人ばかりですが、そういった人々が集まって、互いに切磋琢磨し、自らの人格と職業倫理の更なる向上に努める、というのが、ロータリーにおける「職業奉仕」の基本である。

「四つのテスト」は、ハーバート・テラーというアメリカのロータリアンが、ある企業の再建を引き受けたときに考えた企業の倫理的指針です。彼は、これによって見事にその企業の再建を果たし、それ以来、ロータリアンたちに職業倫理の指針として広く愛用されています。

すなわち、自らの企業の倫理性を高め、従業員やその家族に対する責任や社会に対する責任を果たすこと、このようにして、倫理にかなった事業を営む

ことが顧客の満足と感謝を生み、企業の信用性を高め、結果として自己の企業の安定的かつ永続的な利潤を確保していくことにつながるのだということ、これが「人生哲学としての職業奉仕」とされているのです。

さらに、「職業奉仕」には、自らの職業における専門知識を通じて互いの知恵を交換し、同業者団体の発展に寄与して地域社会や国際社会に貢献していくという考え方も含まれています。

4. 一体論(職業奉仕・社会奉仕)

一体論は、社会奉仕の受益者は奉仕を受ける側であり、職業奉仕の受益者は、奉仕をする側の人間であるという考え方に基づいた理論。例えば、パン屋さんが売れ残ったパンを夕方近所の養護施設に寄付したとする。これは、地域社会に貢献したということから社会奉仕の実践となる。当然、この社会奉仕活動から利益を受けるのは、養護施設の子供達である。

では、奉仕したパン屋さん側はどうか。もし、地元でこの行為が評判になり、お客様が増えたとする。つまり、自分達の行った社会奉仕活動が、結果として、自分達にも利益をもたらしたことになる。自分達が奉仕活動の受益者になったことになる。この時点で、このはじめの社会奉仕活動が職業奉仕になる。

「情けは人のためならず」という言葉に、この一体論の神髄が語られている。

5. 余剰付加価値論(顧客満足度)

商品の価格は、資本(設備、原材料など)+労働(賃金)+付加価値の合計で決まる。例えば、ある商品を買ったお客様が納得して、その金額を支払うか、不満に思うけど、支払うかなど、商品に対しての買い手の気持ちはどうであるかということを重視する。原価に上乗せされた付加価値の金額が、買い手に得したと思ってもらえるかどうか、職業奉仕だという考え方である。

例えばこういうことである。お客様二人の会話:

A:「ここのお料理美味しかったね!」

B:「1人3,000円払ったけど、5,000円って言われても文句ないよね!」

A:「また、みんなで行こう!」

B:「絶対!」

3,000円は適正な付加価値を上乗せした金額、そしてお客様が5,000円でもおかしくないと思った、その差額の2,000円が余剰の付加価値として生じた職業奉仕ということになる。

以上、5つの職業奉仕に対する考え方を説明した。それぞれロータリーの奉仕の実践の中で重きを置く点は異なっているが、そのすべてに共通していることが、2つある。ひとつは、「**職業奉仕の受益者は奉仕される者だけではなく、奉仕する者でもある**」という事実（通常の奉仕活動の受益者は奉仕を受ける者である）、もうひとつは、「**職業は、人々の幸福を叶えるものであり、それ自体が人類および世界平和への貢献である**」という思いではないだろうか。

ロータリーの価値観を探る

●中核的価値観

中核的価値観とは、組織が最も重要であるとする価値観のことである。つまり、日々、我々ロータリアンが活動するうえでの指針とし、重要視すべき概念である。ロータリーの「信条」となり、ロータリアンとして活動する個人個人の行動規範の基盤となる。

今まで考察してきたように、ロータリーは相互扶助（互惠）、親睦、奉仕という3つの価値観をルーツとして1906年に発足した。

ただ、極めて初期の時代から「相互扶助（互惠）」は否定され続け、親睦と奉仕が中核的価値観となり、長い年月をロータリーは歩んできた。

ところが、2010年に国際ロータリー（RI）理事会にて、ロータリーの**中核的価値観は①「奉仕」、②「親睦」、③「多様性」、④「高潔性」、⑤「リーダーシップ」**であると採決され、「多様性」、「高潔性」と「リーダーシップ」が追加されることになった。日本のロータリーでは、「奉仕」とくに「職業奉仕」こそがロータリーの根幹的価値観であるという考えが根強く続いてきており、このRIの採決には日本の古参会員には驚きであった面もあるようだ。

ただ、③「多様性」、④「高潔性」、⑤「リーダーシップ」については、時代の流れに合わせた、中核的価値観への導入であり、組織の基盤として今の時代には要求される価値観であるので、理解できる。

また、この2010年の中核的価値観も、徐々に表現が変わり、現在（2016年度より）は①親睦と国際理解、

②倫理と高潔性、③多様性、④職業の知識とスキル、奉仕、リーダーシップと言い換えられてきている。もし、表記の順番が中核的価値の重要度の順番であると考えれば、日本のロータリーが重要視してきた奉仕、特に職業奉仕の重要度はロータリーの中核的価値としては、重要視はされていないことになる。

●ルーツの3つの価値観の変遷

1906年ロータリーの発足以来、唯一「親睦」だけは変わらぬ価値観として尊重され続けてきているが、一番重要と考え続けられてきたロータリーの中核的価値観「奉仕」については、その考え方は時代とともに変わっていった。奉仕とは①個人奉仕なのか、団体奉仕なのか、②そもそも職業奉仕とは何なのか、③社会奉仕（国際奉仕、青少年奉仕を含む）と職業奉仕のどちらにロータリーは主軸を置くのか、という点に関する考え方の変遷が、ある意味ロータリーの精神面の歴史でもある。

その変遷をシカゴ・ロータリークラブの最初の綱領から、その後起こる出来事、国際ロータリー（RI）で審議された決議案や声明などがどのようにロータリーのルーツである3つの価値観に鑑みての決定であったのかを考察してみる。

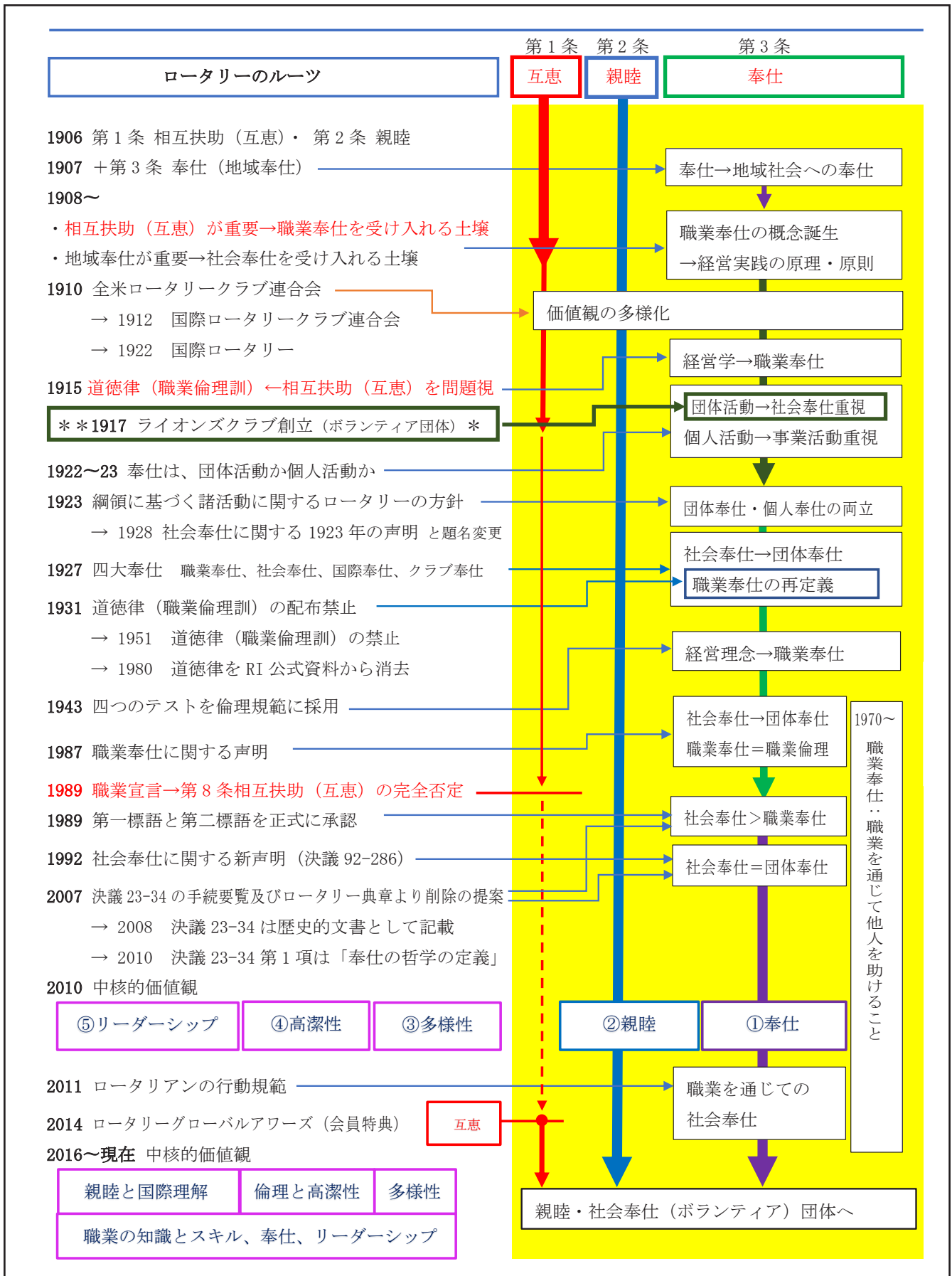
1906年／1907年

第1条：会員の職業上の利益を振興すること
（相互扶助・互惠）

第2条：性質として社交クラブに伴う親睦、その他の望ましい諸点を振興すること
（親睦）

第3条：シカゴ市の最善の利益を推進し、その市民に市に対する誇りと忠義の精神を普及せしめること
（奉仕）

次ページの表は、最初の綱領以降、ロータリーのルーツである3つの価値観の重要度のバランスや意味を変えていった国際ロータリー（RI）の決議、声明や出来事などの歴史的事実と、3つの価値観の変遷とを関係付けてみたひとつの試みである。



*1917年のライオンズクラブの創設と、その後の成長と拡大は、国際ロータリーの考えに大きな影響を与えていると考えられる。

『四つのテスト』を实践する

我々が個人の思考・行動において、大切にすべきモラル上の価値観は何か？ また、その価値観が衝突するとき我々は何を指針や規準にするべきなのか？ その判断の規準としてロータリーが採用したのが『四つのテスト*』である。

四つのテスト

THE FOUR - WAY TEST

言行はこれに照らしてから

Of the things we think, say or do

1. 真実かどうか

Is it the TRUTH?

2. みんなに公平か

Is it FAIR to all concerned?

3. 好意と友情を深めるか

Will it build GOODWILL and BETTER FRIENDSHIPS?

4. みんなのためになるかどうか

Will it be BENEFICIAL to all concerned?

* 『四つのテスト』の日本語訳には、第2項目と第4項目にある英語の「all concerned(関係する全員)」を「all(みんな)」と誤訳しているという批判がある。しかし、仕事・職業上のモットーをどんな分野にも適用できるようにしたいという考えから、あえて日本語訳からは「concerned(関係する)」という単語を削除した、とここでは考えたい。

●モラル上の大切な価値観

米国にあるグローバル・エシックス(世界倫理)協会が「社会生活の中でモラル上大切な価値観は何か」というアンケート調査を世界各国で実施した。その結果、どんな社会であれ、人種、宗教、政治体制、思想、文化の違いを超越して、人々が重要と考えるモラル上の価値観は共通しているということがわかった。そしてそれらの調査の結果として、人類に共通するモラル上の価値観として、次の5つを挙げた。(『意思決定のジレンマ』ラッシュワース M. キダー著)

① 愛 → 友情、好意、慈しみ、同情

② 真実 → 事実、正直、真相、本当、誠

③ 寛容 → 情、慈悲、寛大、思いやり、包容力

④ 公正 → 公平、中立、平等、適正、調和、共感、公明正大、無私無欲

⑤ 責任 → 義務、義理、責務、役目

「自由」や「独創性」が挙げられていないことに疑問を持つ方がいるだろう。これは、ある意味ではこの調査が米国内のみで行われたわけではないことの証であろう。

また、ここで挙げられている5つの価値観は言葉を変えれば、すべてロータリーの求める価値観と一致しているという事実も、当然の帰結である。

上に挙げた5項目が「正しい」ことであれば、その反対が「悪」(悪いこと)になる。

① 愛 → 憎悪、憎しみ

② 真実 → 虚偽、嘘、偽り

③ 寛容 → 狭量、厳格

④ 公正 → 不公平、偏向、依怙臆戻

⑤ 責任 → 無責任、無関心

何が正しく(真実)、何が悪(嘘)であるかが明らかに分かっているときは、我々は判断を誤らない限り、正義と真実を選ぶ。

その判断規準がロータリーの『四つのテスト』の最初のひとつ「真実かどうか」という言葉である。「愛」と「憎しみ」のどちらの道を選ぶかと問われれば、誰もが愛に通ずる道を選ぶ。

●対立する価値観(意思決定のジレンマ)

しかしながら、日常の個人的生活、会社生活の中で判断に困る、どうしたら良いかと悩むのは、多くの場合は「正」と「正」、どちらも正しい場合に、どちらも間違いとは言えない場合に、どちらを選択するかという問題である。先ほど挙げた倫理上の正しい価値観が互いに衝突し合い、意思の決定を妨げる。

これら5つの価値観が、どのような観点で対立するのか？ それにより、次の4つの大きなジレンマが生まれる。

①「正義」対「情」

公正であり、公明正大であることは正しい。しかし、公正な法の運用は、ときに情に反することがあり、共感できない場合もある。

②「短期」対「長期」

「今日の利益」対「明日の利益」、「現実」対「理想」の対立と言ってもよい。差し迫った必要性和要求が今あり、現実的な対策をとるべきか。現在のこの時点のことより、将来の利益や見込み、理想を目指して進むべきではないのか。

③「個人」対「社会」

「利己」対「利他」、「自分」対「他人」、「少数」対「大勢」の対立である。このジレンマに悩んだ先人たちが、ロータリーの思想を培っていった。

決議23-34 第1条: ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—「超我の奉仕」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである。

④「真実」対「忠誠」

「真実」と「嘘」の対立では、正しい選択として誰もが真実を選ぶ。しかし、「真実」は、自分が所属する組織や社会への「忠誠」と対立する場合がある。会社ぐるみの不正行為は、この対立が間違った忠誠心として具現化してしまった例と言える。

●ジレンマの解決

『意思決定のジレンマ』の著者のキダーは、これらのジレンマは次の3つのことを考えることで解決への手掛かりが見い出せると言う。

そして、その3つが「四つのテスト」の残りの3項目と同じであることに、我々は気が付く。

①規範に基づいているか？

規範や法律、習慣、慣例に従うのは当然である。それは万人に公平である。それは「**みんなに公平か**」と質問することである。

②思いやりがあるか？

自分がして欲しいことを相手にもしてあげる。自分のされたくないことは相手にもしない。いわゆる黄金律である。「**好意と友情を深めるか**」という質問に相当するのではないだろうか。

③予測される結果は？

最大多数の最大幸福を目指す。「**みんなのためになるかどうか**」ということを考えてみるということである。

このように「四つのテスト」は、我々が正しく思考し、正しく実践することを可能にする。

最後に、ジレンマ解決法として、少し長くなるが、『意思決定のジレンマ』で紹介されている実際の体験を引用しておく。

◆苦しみから解放するためにその人を殺すべきか 悩んだハイウェイ警官

この事例はオハイオ州の高速道路で起きた衝突事故現場に自動車修理工が呼び出された事例である。

彼の父親(自動車修理工)は、森に囲まれた、周囲から孤立した現場に到着したとき、どこで何が起こったのかを直ちに理解した。大きな平床式トラックが、高速道路からはずれて暴走し、木に真正面から衝突したのだ。その衝撃で積み荷の鋼鉄が外れて運転台の後方から車内に突っ込んできて、運転手を動けないように釘付けにしてしまったのだ。運転台に火が付き、いつ爆発するかわからない危険な状態だった。

その父親の到着とほぼ同時に、州警察の車両も到着した。警官が開いている運転席の窓に駆け寄ったとき、彼は、車内の運転手が「撃ってくれ。俺を撃ってくれ」と叫んでいるのを聞いた。積み荷の鋼鉄を持ち上げて、運転手の身体を自由にすることができないのは明らかだった。煙が激しさを増すなかで、警官はゆっくりと拳銃をケースから引き出した。そして、警官は一瞬ためらい、考え直して拳銃をもとのケースに収めた。

運転手の叫びはなおも続き、警官は再び拳銃を抜いたが、またしてもケースに戻した。

まさしく、この葛藤の瞬間に、警官が素晴らしい行動に出たのを、修理工である彼の父は目撃した。警官はパトカーに駆け戻り、小さな四塩化炭素消化器をつかみとった。火を消すには十分とはいえないが、運転手の顔にかければ彼を眠らせるには十分だった。そして警官はそれを行った。

間もなくして、運転台は爆発した。

この時、この警官は2つのことに悩んだ。人を殺してはいけない、ということと、苦しんでいる人がいたら助けてあげなくてはならないというジレンマである。

慈悲をもって最後の悲痛な叫びにどう応えたらいいのか？ 限られた時間の中で彼が思いついたのは運転手を眠らせることだった。

何かのジレンマに落ち込んだときに、どうしてもそのジレンマに捉われてしまう。しかし、第三の選択肢があるかも知れないと思いつくことの重要性をこの体験談は教えている。また、そのためには常に正しい結論が出せるように「倫理的フィットネス」が必要だと著者は語っている。その「倫理的フィットネス」とは、ロータリアンにとって、常に『四つのテスト』を実践することではないだろうか。

『四つのテスト』の実践の手助けとして『四つのテスト』実践フローチャートを巻末に載せた。新しいひとつの試みとしてみたい。

ロータリーとライオンズ

この項目の記述は、あくまでもロータリーの一会員としての目線での意見であることをお断りしておきます。また、ライオンズクラブや他の団体に関する情報はホームページなどで公開(2021年6月現在)されている資料に基づいています。

ロータリークラブとライオンズクラブを比較することにはまったく意味がない。共に目指すところは同じであるのだから。それは「**明るい地域社会の創造、平和と国際理解の推進**」である。しかしながら、我々は何度も繰り返し質問されるこの両者の違いの問題を多少なりとも知っておく必要はあるのかも知れない。

その前に、ロータリーと同種の団体組織にはライオンズ以外にいかなる組織があるのでしょうか？

キワニスクラブ: ロータリークラブ、ライオンズクラブに並ぶ、世界3大奉仕団体の一つ。ミシガン州デトロイトに1915年に設立。

名称は、デトロイト周辺のインディアンの言葉「NUN-

Kee-Wan-is」(皆一緒に集まる)に由来する。世界90か国の約8,000のクラブで構成され、活動している。会員は成人が約26万人、青少年などのファミリー会員を含めると約60万人。活動の特徴は「世界の子供たちに奉仕する」である。「まず子どもを第一に考えよう(Young Children Priority One)」がモットーである。日本には、42クラブ、会員数約2,100人。

国際ソロプチミスト: 1921年にカリフォルニア州オークランドで設立。約121ヶ国に2,947のクラブ、71,199人の会員を有する、女性の世界的な奉仕団体である。女性の地位向上を目指す。

国際ゾンタ: 1919年にニューヨーク州バッファローで設立。1928年にシカゴに本部が設置された女性の地位向上のために協力し合う世界的な奉仕団体。「ゾンタ」とは、インディアン・スー族の言葉で「正直で信頼できる」という意味。現在、63ヶ国、1,200以上のクラブ、およそ29,000名の会員。

フリーメイソンリー: 奉仕団体というより、社交クラブ的な組織。一般的に使われている「フリーメイソン」は会員を指す言葉(Free and Accepted Mason: 自由でかつ受け入れられた石工職人)、団体名は「フリーメイソンリー」。

秘密結社と良く言われるが、正しくは非公開団体である。現在はホームページさえ持っている。各クラブは「ロッジ」と呼ばれる。このロッジも、それぞれホームページを作っている。ロータリー財団にあたるのが、メイソン財団であり、メイソン財団にもホームページがある。原則、非公開団体ということで、会員数はよくわからない。全世界では300万人とも600万人とも言われる。日本では20から25のロッジがあり、会員数は1,500人から3,000人。そのうち日本人は1割くらいだと言われる。

フリーメイソンリーを除く、上述の組織は、すべて第一次世界大戦前後に米国において設立されている。つまり、第一次世界大戦をヨーロッパの戦争としてある意味で傍観でき、余裕のあった米国だからこそ、このような「他人への思いやりと助け合い」を旨とする組織が生まれる素地を持っていた。

思想史的には、第一次世界大戦前後で「自由」の概

念が変わった事実がある。大戦前までの「自由」は「他人に迷惑をかけなければ、何でもできる」という自由であり、古典的自由と呼ばれる。今でも、ただ単に「自由」というときはこの意味で使われることが多い。第一次世界大戦前後に、「自由」は「他人への思いやりと助け合い」をも含むようになる。「新自由主義」の誕生である。より社会が複雑になり、他人に迷惑をかけなければ良いという考え方では、よりよい社会を構築することはできないと誰もが気づいた。このように「自由」の概念が変わったのは、第一次世界大戦を挟んで、ロータリーやライオンズのような「他人への思いやりと助け合い」を旨とする組織が次々と設立されていった歴史的事実に由来するに違いない。

本題に戻ろう。ロータリーとライオンズを比較するとき、簡単に言ってしまえば、以下のようになる。

- ・ ロータリー：クラブ会員をひとつの単位として活動する職業奉仕団体*
- ・ ライオンズ：クラブ全体をひとつの単位として活動する社会奉仕団体

* 職業奉仕という言葉は一般社会では認知されておらず、ロータリーも社会奉仕団体と記載される場合が多い。国際ロータリーのホームページ上の「ロータリーのしくみ」においても「ロータリークラブ：世界各地のロータリークラブとローターアクトクラブは地元根ざして活動しています。クラブの会員(通称「ロータリアン」)は、交流やボランティア活動を通じて視野を広げ、会員同士の友情や地域社会との絆を培っています(2021年6月現在)と説明されているだけである。これではいくら我々会員が「ロータリーは職業奉仕団体である」と訴えても、一般社会では理解されようがない。

●ライオンズクラブ

ライオンズクラブの発足は1917年、ロータリークラブと同じ米国・シカゴが発祥地である。創始者はメルビン・ジョーンズ氏。新しい組織は「ライオンズ」と呼ばれることになる。百獣の王・ライオンは強さ、勇気、忠誠、生命活動の象徴であるという理由からである。その後、1919年「LIONS」という単語は「L」はLiberty、「I」はIntelligence、「O」「N」「S」はOur Nation's Safetyの5つ

の単語の頭文字であるという解釈が採択された。

Liberty, Intelligence, Our Nation's Safety(自由を守り、知性を重んじ、われわれの国の安全を図る)

会員数は、ロータリーを上回り、奉仕団体としては世界一の規模を誇る。広報活動においても、ライオンズは活発である。

ライオンズのモットーは「We serve(私たちは奉仕する)」という言葉で表される。

●会員の行動規範および義務

両クラブの目的をしめす言葉としては、ロータリーには『ロータリーの目的』があり、ライオンズには『ライオンズの誓い』というものがある。ライオンズの誓いは「われわれは知性を高め、友愛と相互理解の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する」と謳っている。

会員の行動規範としては、ロータリーには『ロータリアンの行動規範』(下記参照)がある。また、行動・決断する前に熟考すべき『四つのテスト』という指針もある。ライオンズの行動規範は『ライオンズ道徳綱領』(下記参照)であろう。

『ライオンズ道徳綱領』は職業人としての考え方と公民としての義務を謳っている。職業については、①職業の尊さを確信する、②不当な利益を求めない、③他人の事業を妨害しない、④顧客や自分に忠実である、⑤心と心の触れ合いを大切にするとある。これら記述から、ライオンズもまた職業奉仕の考えを持っているという人々もいるのは事実である。しかし、これはロータリーでいうところの「事業の基礎(基盤)としての奉仕の理念」とは違い、「事業を意義あらしめるための経営理念」である。ロータリーでいう職業奉仕、つまり、職業それ自体が奉仕である、という考え方とは異なる。

この項目に続く『ライオンズ道徳綱領』の最後の3つの項目をみてみれば、それは理解できる。それは公民の義務として記述されている。⑥すすんで時間・労力・資力をささげなさい、⑦私財を惜しまない、つまり職業(事業)で得た利益を進んで社会奉仕や寄付に使いなさい、⑧周囲と建設的な関係を築きなさい、それが公民としての義務だと謳っています。ライオンズでいう

職業(事業)とは、公民の義務として社会に奉仕するため、寄付するための源泉と考えられているようである。

ロータリーには、この公民としての社会への義務(時間と労力、私財を惜しむな)という条項はない。ロータリアンとして守るべき行動の条項があるだけである。

『ロータリアンの行動規範』

1989年に採択された『ロータリアンの職業宣言』が改定・改題され、2011年に採択された。その後、2014年に大幅に改定され「互恵禁止」条項が削除された。2019年には、時代に合わせて「ハラスメント」条項が追加された。

ロータリアンとして、私は以下のように行動する。

1. 個人として、また事業において、高潔さと高い倫理基準をもって行動する。
2. 取引のすべてにおいて公正に努め、相手とその職業に対して尊重の念をもって接する。
3. 自分の職業スキルを生かして、若い人びとを導き、特別なニーズを抱える人びとを助け、地域社会や世界中の人びとの生活の質を高める。
4. ロータリーやほかのロータリアンの評判を落とすような言動は避ける。
5. ロータリーの会合、行事、活動においてハラスメントのない環境を維持し、ハラスメントの疑いがあれば報告し、ハラスメントを報告した人への報復が起こらないようにする。

『ライオンズ道徳綱領』

1963年に制定、1967年から現在まで変更はない。

1. 職業に対する不断の努力が正しく賞賛されるよう心がけ、自己の職業の尊さを確信すること。
2. 事業を成功させて、適正な報酬や利益は受けるべきであるが、自己の立場を不当に利用したり、人に疑われる行いをして自尊心を傷つけてまでも利益や成功を求めないこと。
3. 事業をし遂行するにあたっては、他人の事業を妨害しないように心がけ、顧客や取引先に誠実であり、自己にも忠実であること。
4. 世人に対する自己の立場や行いに疑いが生じたときは、世人の立場に立って解決にあたる。
5. 真の友情は損得の上に築かれるものではなく、心と心のふれ合いによるものであることを自覚し、手

段としてでなく目的として友情をもつこと。

6. 国家および地域社会に対する公民の義務を忘れず、かわらぬ忠誠を言葉にあらわし、すすんで時間と労力と資力をささげること。
7. 不幸な人には同情を、弱い人には助力を、貧しい人には私財を惜しまないこと。
8. 批判は謙虚に、賞賛は惜しみなく、建設を旨として破壊をさけること。

●国際貢献

世界的な奉仕活動としての顕著な例は、ロータリーがポリオ根絶を全世界的に支援しているように、ライオンズは失明者や視力障害者への支援に力を注いでいる。それは、ライオンズクラブ国際大会で講演をしたヘレン・ケラーが「暗闇と闘う盲人のために十字軍の騎士」となるよう呼びかけた1925年から始まった。今日、世界中の視覚障害者が使用している「白い杖」は1930年にライオンズクラブの発案で始まった。

ロータリーのポリオ根絶についても少し触れておく。その活動は1979年にフィリピンで始まった。しかし、この問題にロータリーが本気で取り組み始める契機を作ったのは、東京麹町RCの山田ツネ氏と峰英二氏である。南インドで山田氏は手足のまひした少年にであった。その時の衝撃が山田氏がポリオに一生を捧げるきっかけとなり、その後、地区WCS(世界社会奉仕)活動として同じクラブの会員である医師の峰氏とともに何度もインドを訪れ、ポリオ根絶に尽力した。国際ロータリーに対しても何度も嘆願書を送り、ポリオ根絶に立ちあがるように依頼した。その甲斐があって、ついに国際ロータリーはポリオ根絶に本格的な力を注ぐこととなり、今日に至っている。

ロータリーの国際的貢献は他にもある。そのひとつはユネスコ(国連教育科学文化機関)の設立に関係している。実はロータリーは、ユネスコの産みの親である。1942年21ヶ国のロータリークラブがロンドンで会議を開き、第二次世界大戦後における教育、科学、文化を振興するための国際的な交流の可能性を検討した。この検討したビジョンが基になってヨーロッパ各国の文部大臣があつまって設立されたのがユネスコである。

国際ロータリーは国連との協力関係の歴史は長く、1945年49名のロータリアンが、サンフランシスコにおける国連憲章採択会議に参加した時から始まる。より平和な世界を築くというビジョンを掲げ、今も協力関係は続いている。

●個人奉仕と団体奉仕

ロータリーとライオンズの違いは、そのモットー(標語)によく示されている。

ロータリーには第一標語「Service above self(超我の奉仕)」と第二標語「One profits most who serves best.(最もよく奉仕する者、最も多く報いられる)」があるが、これはともに個人的な奉仕活動に言及した言葉である。これに対してライオンズの標語「We serve(我々は奉仕する)」はみんなで協力していこうという姿勢を強調し、団体的な奉仕活動を目指している。個人個人の力を集結すれば、それは $1 + 1 = 2$ ではなく、3にも、4にも、5にもなる、ということである。

ライオンズの「We serve」に対して、ロータリーは「I serve(私は奉仕する)」だと、しばしば言われる。しかし、ロータリーには「I serve」という標語は存在しない。あくまでも、ライオンズの存在を念頭においた比較表現である。(ただし、日本語版手続要覧には「ひとり」または「一人一人」、「個人」、英語版手続要覧には、個人を意味する「individual」という単語が散見されることは事実である。)

●重要視する価値観

ライオンズが、その名前の解釈として、またスローガンとしてあげている3つの価値観「自由」「知性」「国の安全」は、ロータリーには見られない概念である。ロータリーはアメリカ建国の精神のひとつである「自由」(古典的自由)の履き違えが、個人主義に走り、個人の利益を社会的利益よりも優先してしまったという反省から、「自由」よりも「公正、公平」をひとつの美德としている。

また、ロータリーの要である職業奉仕の実践のうえで最も大切であることとして、「知性」よりも「倫理」を重要視している。「知性」をつけることは重要であるが、それ以上に「倫理」の向上を強調する。ライオンズの

最後の価値観「国の安全」は、すべての国が安全で戦争のない国になれば、それが世界全体の平和に通じるということであろう。しかし、自分たちの国だけの安全を考えれば、それは当然他国との争いを生じる。Our Nation's Safety(我が国の安全)ではなく、Our Nations' Safetyとすれば「国々(共通のひとつ)の平和」と理解できるのだが(アポストロフィー「'」の位置に注目)。ロータリーは、世界はひとつとして各国の利害関係を超越したうえでの国際理解と国際平和を目指す。

●両クラブの活動の理念

今までは、両クラブの発足時の価値観や考え方の違いに焦点を当てて、両者の違いを考えてきた。しかしながら、両者の奉仕の実践においては、ほとんど違いが見られないのも事実である。ロータリーの個人奉仕・職業奉仕は、我々がそれを形として表現できるものではない。一所懸命、職業に励むことが奉仕だと言っても、世間一般の方々からは理解されない。また、その反対にライオンズの団体奉仕・社会奉仕は形・結果として地域に示され、地域住民に訴えるものがある活動である。その結果は広報活動としても確実に地域住民に訴えるものがある。職業奉仕を第一とするロータリーの活動では、このことが大変に難しい。したがって、現在の国際ロータリーは、奉仕活動としては社会奉仕、ボランティア活動に重点をおき、宣伝・広告を含む広報活動の必要性を訴えている。このように、ロータリーの特徴がだんだんと失われていき、ライオンズをはじめとする他団体との違いが薄れていってしまっている事実は隠しようがない。

我々はロータリアンとしての自負を持ち、自分の職業に真摯に取り組みながら、自分たちが社会に貢献できる分野でも、その力を最大限に発揮できるように努力することにより、今後のロータリーの発展に貢献できるのではないだろうか。

最後に、ロータリーはライオンズを始めとする他の奉仕団体と共存共栄の道を模索し続けていくべきであろう。各奉仕団体がその組織の特徴を生かした活動を展開していくことにより、切磋琢磨しながら、世界平和への道を切り開いていくことが望まれている。

ロータリーのある風景 (その歴史)

あるロータリークラブが、ある地域社会に根を張り、成長していくには、何が必要であろうか？ それを「ロータリーのある(有る、或る)風景」として、その歴史を物語ってみたいと思う。

まず初めに、**荒れ果てた大地(地域社会)**を想像してください。そこはあらゆるものが、今にも腐敗し、完全に朽ち果ててしまいそうな大地です。しかし、まだこの大地には今にも枯れ果てそうではありますが、細い小川がかろうじて1本流れていました。

その小川のほとりに**一粒の種(ロータリークラブ)**が落ちました。その種は**3つの根(互惠、親睦、奉仕)**を張りました。小川の水(会費、寄付)を吸収したその根はから小さな芽が萌えてきました。その小さな芽は、それ自身の**導管(奉仕の理念)**を通し、水分や栄養を幹や葉に供給し、自分自身を成長させていきます。しかし、もっと大きく成長するためには、より良い**肥料(標語／四つのテスト)**が必要です。肥料により栄養を十分に与えられた芽は、やがて**太い幹(職業奉仕の理念)**となりました。幹はどんどんと真っすぐに成長していきます。しかし、幹が太くなればなるほど、雨や風などの影響を受けやすくなり、真っすぐな一本の幹には成長しませんでした。

やがて、幹は枝分かれています。大きな**枝(団体奉仕／社会奉仕)**ができました。このままでは幹は二分し、やがては倒れてしまうでしょう。そこに木こりが現れました。木こりは、大きく成長しかけた枝を切り落としました(**決議23-34**)。これで、幹は一本の**樹(個人奉仕、職業奉仕)**として成長できます。その後太く成長した幹は、その枝に**4つの大きな青葉(クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕)**を生い茂らせました。

その青葉に小鳥たちが集まりだします。リスは枝に実った木の実を食べます。食べ残された木の実が草原に落ちました。そこから新しい芽が生まれました。

しかし、小川からは少し離れている所なので、小川からは水が吸収できません。やがて、心ある人たちが、その芽に**水(寄付)**を与えてくれるようになりました。新し

い芽は一本の**新しい幹(世界平和)**となり、**青葉(ロータリー財団、米山記念奨学会)**を生い茂らせるようになりました。

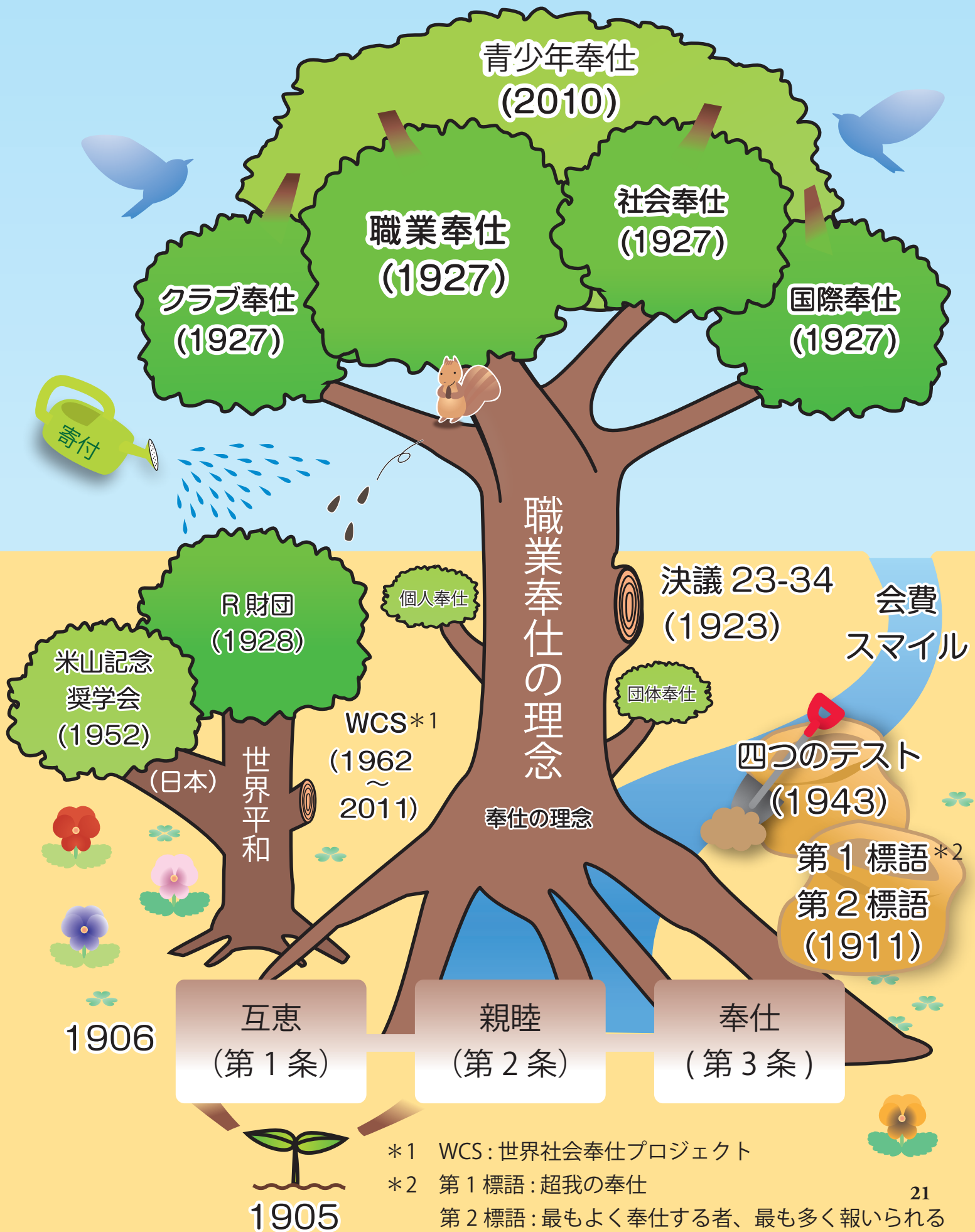
また、しばらくすると、枝に茂った4つの大きな**青葉(クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕)**のそれぞれから、新しい枝が生え、そこに**新しい青葉(青少年奉仕)**が茂りだしました。4つのももとの青葉に重なるように青々と成長していきます。

同じような**樹々(ロータリークラブ)**が大地にどんとと広がり始めました。多くの草花が咲き誇り、いろいろな小鳥たち、動物たちが集まり始めます。細く枯れ果てそうだった小川もやがて大河へと姿を変え、荒れ果てた大地は**青々とした草原(繁栄、世界平和)**に姿を変えましたとき。

参考文献・資料

- 『2010年手続要覧 ロータリアンの手引き』
- 『ロータリー章典』
- 『ロータリー哲学』アーサー・F・シェルドン著／田中毅訳
- 『ロータリー歴史探訪』田中毅著
- 『ロータリーの心と原点』廣畑富雄著
- 『ロータリー・クラブ その理論と実態と批判(重訂版)』小堀憲助著
- 『奉仕の一世紀』ディビッドC. フォワード著／菅野多利雄日本語訳監修
- 『Rotaryってなんですか?』戸田孝(八尾RC)著
- 『ロータリーの基本』杉田博(大和高田RC)編集
- 『ロータリーを「わかる」ために』森三郎(行田さくらRC)著
- 『国際ロータリー第2590地区 ロータリー検定問題集』2012-13年度地区R情報・広報・IT委員会編纂
- 『ためになる魅力あるロータリーガイドブック』2020-21年度 国際ロータリー第2590地区研修委員会編纂
- 『マネージメント』(エッセンシャル版) P. F. ドラッカー著／上田惇生訳
- 『世界は宗教で動いている』橋爪大三郎著
- 『キリスト教の真実』竹下節子著
- 『ホモ・ファールー—西欧文明における労働観の歴史』アドリアーノ・ティルゲル著／小原耕一、村上桂子訳
- 『日本政治思想史 十七～十九世紀』渡辺浩著
- 『意思決定のジレンマ』ラッシュワース M. キダー著／高瀬恵美訳
- 『教養として知っておきたい二宮尊徳』松沢茂文著
- 『論語と算盤』渋沢栄一著

ロータリーのある風景（その歴史）



西暦	出来事	内容	理念
1900			
1903			
1904			
1905	シカゴ・ロータリークラブ設立		ガスターバス・ローア、シルベスター・シール、ハイラム・ショーレー、ポール P. ハリス
1906	クラブ定款	第1・2条	相互扶助（互恵）・親睦
	クラブ定款変更	3条追加	奉仕（一般概念としての「社会への奉仕」）
1907	公衆トイレの設置（シカゴ）		初めての奉仕活動（現在の意味における社会奉仕活動）
	親睦・互恵派と奉仕拡大派の対立		このときの奉仕とは、今でいう社会奉仕であるのか、職業奉仕であるのか。どちらかという狭義の社会奉仕。
1908	アーサー・シェルドン入会		奉仕理念の創始者。ただし、職業奉仕的な発想が最大の特徴。職業そのものが社会への奉仕活動である。
1908	サンフランシスコRC設立		2番目のRC
1910	全米ロータリー・クラブ連合会		初の国際大会
	「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」	奉仕理念	奉仕の理念の誕生（1902：アーサー・シェルドンの経営哲学）
	職業分類表の導入		
1911	機関紙発行		The National Rotarian→The Rotarian
	「超我の奉仕」		Service not self→1920頃より、Service above self
	「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる」	モットーとして採択	His Fellow Bestが削除される（何故？ 会員（His Fellows）間の相互扶助が利己的だから、業界人（His Fellows）だけに限定したくないから）
1912	カナダ、イギリスにRC誕生	米以外で初	ウィニベグRC、ロンドンRC
	「全米ロータリー・クラブ連合会」→「国		
	ロータリーの綱領		初めて職業倫理の高揚を謳う
1913	米国シラキューズRCが障害児委員会を任命		青少年奉仕の萌芽
1914	イギリスロータリークラブ連合会（BARC）		→後に、1922年にRIBI（ロータリー唯一の地域単位組織）
	初めてのIntercity Meeting（IM）		サンフランシスコRCとオークランドRCが開催した。
1915	全分野の職業人のためのロータリー職業倫理訓	職業奉仕の基準の確立	「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」が宗教的過ぎると批判を浴びる。1931年宣伝および頒布の中止、1951年RI文書からの削除、1980年RI細則の表現から削除、完全に削除される
1917	R財団の基礎となる基金を設置		アーチ C. クランプリ会長
1918	The symbolism of service		The Rotarian 1918年9月号（by アーサー・シェルドン）
1919			
1920	東京ロータリークラブ設立		日本のロータリークラブの始まり
1921	The philosophy of service（ロータリー哲学）		The Rotarian 1921年2月号（by アーサー・シェルドン）
	海外での初めての国際大会（スコットランド・エジンバラ）	国際奉仕の綱領化	綱領の中に国際親善と平和の項目が加わる。
1922	国際ロータリー（Rotary International）が正式名称となる		
	決議22-17		身障者への団体奉仕の勧め
	大阪ロータリークラブ設立		東京ロータリークラブに次ぐ、日本で2番目のクラブ
1923	決議23-8		身障者団体の活動を代行→否決
	決議23-34	奉仕理念の定義	「綱領に基づくロータリーの諸活動に関する方針」
1924	現在の原型となる歯車の徽章を正式採用		それまでは車輪のマークが使われていた。
1925			
1926	決議23-34のタイトル変更		「社会奉仕に関する1923年の声明」

リ一年表

	欧州	日本
	4月：パリ万博	2月：足尾鉞毒デモ鎮圧
12月：ライト兄弟初飛行		2月：日露戦争勃発
6月：世界産業労働組合（Industrial Workers of the World, IWW）シカゴに創	1月：血の日曜日（ロシア革命始まる）	8月：日露講話条約締結
4月：サンフランシスコ大地震		
12月：世界初のラジオ放送成功		
1月：ゼネラルモーター社設立	12月：伊シチリア島大地震（死者15万人）	
10月：T型フォード発売開始		
3月：ロックフェラー財団設立	1月：パリ大洪水	
5月：全米黒人向上協会設立		
	4月：タイタニック号沈没	7月：明治天皇崩御
2月：累進所得税を採用		
	7月：第一次世界大戦勃発	
4月：第一次世界大戦参戦	11月：ソビエト連邦建国	4月：日本工業倶楽部創立
	11月：第一次世界大戦終戦	3月：松下幸之助会社設立、24歳
10月：第一回国際労働会議	1月：パリ講和会議（人種差別撤廃条項を否決）	
1月：禁酒法施行	1月：国際連盟成立	10月：第一回国勢調査
11月：ラジオ定時放送開始		
	11月：BBCラジオ放送開始	7月：日本共産党創立
		9月：日本経済連盟会創立
		野田醤油労働争議～28年
		1月：文芸春秋創刊
		9月：関東大震災
7月：移民法施行（日本では排日移民法と呼ばれる）		
8月：KKKワシントン大行進（20万人）		細井 和喜蔵「女工哀史」

西暦	出来事	内容	理念
1927	オステンド国際大会（ベルギー）		4大奉仕の採択。これまで基幹として奉仕理念（職業奉仕）に、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕の重要性を認めた。
	初の青少年交換プログラム		コペンハーゲンRC（デンマーク）が米国の少年たちを受け入れ
1929	ロータリー財団：初の補助金		ロータリー財団は初の補助金500米ドルを、国際障害児協会（後のイースターシール）へ授与しました。これは、米国オハイオ州エリリア・ロータリー・クラブ会員だったロータリアン、エドガー F. アレンによって1921年に創設された団体です。
1930	アーサー・シェルドン退会		
1931	道徳律（職業倫理訓）の配布禁止		
1932	4つのテストが作られる（ロータリー外）		ハーバード J. テイラーが会社再建のために、社内にて使い始める。
1934			
1935			
1939			
1942	ロンドン会議		第二次世界大戦後の時代を展望して21カ国のロータリークラブがロンドンで会議を開催、教育・文化の国際的な交流を検討した。この会議の精神が基になって国連教育科学文化機関（ユネスコ）が誕生した。
1943	4つのテストを倫理規範として採用	倫理規範	
1945			
1947	ポール・ハリス死去（享年78歳）		
1950	二つ標語を正式に承認		
1951	道徳律（職業倫理訓）の廃止		
	現在の綱領となる		1935：Objets→1951：Object（ロータリーの目標はひとつ）
1954	4つのテストの著作権を譲り受ける		1946年説もある。
1959	初めてのロータリー青少年指導者養成プログラム（RYLA）		ブリスベーンRC（オーストラリア）が開催する。
1961	第52回国際大会 東京		日本で初めての国際大会開催
1962	世界社会奉仕（WSC）プログラムを採択		
	初インターアクト・クラブ創立		
1964			
1965	研究グループ交換（GSE）を開始		
1968	初ローターアクト・クラブ創立		
1970	規定審議会がロータリーの公式の立法機関		
1971	ロータリー青少年指導者養成プログラム		
1978	第69回国際大会を東京で開催		日本で2回目の国際大会
1979	ロータリー財団が、初の3-H補助金を支給	ポリオ撲滅活動開始	3-H：保健、飢餓追放、人間性尊重（フィリピンにてポリオ撲滅のため）
1980	RI細則より「道徳律」の文字を削除		「道徳律」は歴史的文献となり、公式資料から消える。
1985	ポリオ・プラスを発足		
1987	職業奉仕に関する声明		道徳的水準を守り、有用な職業の社会に対する価値を認める、職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てる
	女性が初めてロータリーに入会		訴訟を起こしたカリフォルニア州のデュアルテ・ロータリー・クラブは、1977年に女性を入会させたことで除名されていましたが、この年に国際ロータリーに加盟復帰しました。
1989	職業宣言		相互扶助の完全否定
	第一標語と第二標語を正式に承認		
	クラブの会員資格を男性に限るとする要件を削除		1989年、規定審議会は、クラブの会員資格を男性に限るとする要件を削除し、世界各地のクラブで女性の入会を認めることを可決しました。
	日本語「ロータリーの綱領」	改訳	2013年に「ロータリーの目的」として改訳
1995	女性ガバナーの誕生（8名）		

リ一年表

	欧州	日本
10月：世界大恐慌		
	シモーヌ・ヴェイユ「工場日記」～35年	
7月：ワグナー法 (Wagner Act) 最低賃		
	9月：第二次世界大戦勃発 (独がポーランドに侵攻)	
8月：第二次世界大戦終戦	8月：原子爆弾投下される	
1月：アル・カポネ死去 (享年48歳)		
60年代より「公民権運動」が活発になる		
7月：公民権法 (Civil Rights Act) 制定 (法的な人種差別の終焉)		
		3月：大阪万博
9月：ニューヨークのプラザホテルでG5 (日米英独仏) の蔵相が集まり、過度のドル高を是正することが決定された (プラザ合		
		6月：国民的歌手・美空ひばり永眠 (享年52)

西暦	出来事	内容	理念
1999	ロータリー・センター設立		未来のリーダーや外交官を育成することを目指し、ロータリーの、平和および紛争解決の分野における国際問題研究のため。
2001	「一業種一会員」→「一業種多会員」		
2004	第95回国際大会を大阪で開催 RI戦略計画委員会の設置		日本で3回目の国際大会
2007	決議23-34の削除の提案		社会奉仕の理念並びにRIとクラブの原理を正確に記すものではない(RIのポリオ・プラス・プログラムの推進に障害になる)という理由。
	NPO法人国際ロータリー日本青少年交換委員会(RIJYEC)設立		青少年交換プログラムに参加する地区は、法人化、保険加入と危機管理委員会の設置が義務付けられた。
2008	決議23-34：歴史的文章		歴史的な文書として保存すること、および歴史的な価値を有するものとして手続要覧に記載されていることを言及する文を、ロータリー章典に含めることに決定。
2010	決議23-34：復活 RI戦略計画 3つの優先事項		歴史的文章として残す。「歴史的」を削除 「クラブのサポートと強化」「人道的奉仕の重点化と増加」「公共イメージの向上」
	RI戦略計画 中核的価値観		「奉仕」「親睦」「多様性」「高潔性」「リーダーシップ」
2011	ロータリアンの行動規範		1987年「職業奉仕に関する声明」→1987年「職業宣言」→「ロータリアンの行動規範」
2013	ロータリーロゴの変更		ロータリーは公式ロゴの変更。歯車の左側に「Rotary」の文字を入れた。
	研究グループ交換(GSE)を廃止		職業研修チーム(VTT)として形を変えて存続
	ロータリー財団「未来の夢計画」の本格的実施の開始		衛星クラブの設立の認可
	日本語版「ロータリーの目的」	改訳	「ロータリーの綱領」を「ロータリーの目的」として改訳
	衛星クラブ開始		衛星クラブは8人の会員で結成が可能。会員数が20名以上となった場合、衛星クラブのまま維持か、独立したロータリークラブとなるかを選択。
2014	ロータリーグローバルアワーズ		会員特典の承認
	「ロータリアンの行動規範」より、会員間の互惠を禁止する条項を削除		会員間の相互扶助(互惠)の復活
2016	中核的価値観の表現の変更		「親睦と国際理解」「倫理と高潔性」「多様性」「職業の知識とスキル、奉仕、リーダーシップ」
	会員資格の柔軟性を採択	会員	「正会員」のサブカテゴリーとして「準会員」「法人会員」「家族会員」「シニア会員」などの会員種類を定められるようになった。
2018	未来形成委員会が発足		Shaping Rotary's Future(未来形成) ロータリーが時代にあった組織に変革していくように新たな視点で活動する。
	一般社団法人国際ロータリー日本青少年交換多地区合同機構(RIJYEM)が誕生		前年、RIより「ロータリー青少年保護の手引き」が公布されたことを受け、NPO法人国際ロータリー日本青少年交換委員会(RIJYEC)を改編。
2019	ロータアクトクラブのRI加盟を承認		RIはロータリークラブとロータアクトクラブの合同体となる。
2020			世界中でロータリー活動が中止・延期される

リ一年表			
		欧州	日本
	9月：アメリカ同時多発テロ事件		
	10月：サトシ・ナカモトという名前を使った匿名の人物がインターネット上に「Bitcoin: A Peer-to-Peer Electronic Cash System」という論文を発表した。		
			3月：東日本大震災
			大谷翔平、MLBエンゼルスに移籍
			大谷翔平、新人王
	中国・武漢から始まったコロナ感染のパンデミックにより、世界中で387万人を超える死者（2021年6月現在）		7月開催の東京オリンピック・パラリンピックを2021年に延期

ロータリーの綱領の変遷

便宜上、条項番号は以下丸数字を使用しています。

1906年

- ① 本クラブ会員の事業の利益の増大。
- ② 通常社交クラブに付随する親睦及びその他の特に必要と思惟する事項の推進。
後日、もう1カ条採択された。
- ③ シカゴの最大の利益の推進、及び市民の誇りと忠誠とを市民の間に拡めること。

1910年

- ① アメリカ全土に加盟ロータリークラブを結成することにより、ロータリーの原則を拡大伸展させること。
- ② アメリカ全土の加盟ロータリークラブの仕事及び原則を統一すること。
- ③ 市民の誇り及び忠誠を鼓舞激励すること。
- ④ 進歩的でかつ尊敬され得る営業方法を推進すること。
- ⑤ 加盟ロータリークラブの会員個人の事業の利益を増大すること。

1912年

- ① 世界のすべての商業中心地にロータリークラブを結成するよう奨励推進すること。
- ② 現存ロータリークラブの仕事と、所属会員並に地域社会に対するこれらクラブの価値とを研究し、かくして得た情報を全ロータリークラブのために明らかにすること。
- ③ 広い友愛精神と、各国各都市のロータリアン職業人同士及び加盟クラブ間の利益の調和とを推進すること。

この年、次の綱領を合む模範ロータリークラブ定款及び細則が承認された。

- ① すべての合法的職業は尊重されるべきであるという認識を助長し、かつ各会員の職業を社会への奉仕の機会を提供するものとして品位あらしめること。
- ② 実業及び専門職業の道徳的水準を高めるよう鼓吹すること。
- ③ 構想や事業運営方法の交換により各会員の能率を増進すること。

- ④ 奉仕の一つの機会として、又成功を助長するものとして、情理のある交友関係を推進すること。
- ⑤ 公共の福祉に対する会員各自の関心を刺激し、かつ市の発展のために他の人々と協力すること。

1915年

- ① ロータリーの原則並に活動を標準化し、かつ普及すること。
- ② 世界のすべての商業中心地にロータリークラブを結成するよう奨励し、推進し、監督すること。
- ③ 現在ロータリークラブの活動と、所属会員並に地域社会に対するこれらクラブの価値とを研究し、かくして得た情報を全ロータリークラブのために明らかにすること。
- ④ 偏見のない友好の精神をロータリアン同士並にロータリークラブ間に推進すること。
- ⑤ クラブの地域社会の公共の福祉に対するクラブ会員の関心を高め、かつ、市、社会、商工業の発展のために他の人々と協力すること。
- ⑥ 同僚や社会一般のために奉仕したいという意欲を起すよう会員を鼓舞すること。

1918年

- ① 世界中のすべての商業中心地にロータリークラブを結成するよう奨励、推進、監督すること。
- ② 地方的活動ではなく、全加盟ロータリークラブの仕事及び活動を調整し、標準化し、かつ全般的に指導すること。
- ③ 国際連合会自体の活動を通じ、又加盟ロータリークラブを通じて次の事項を鼓吹し育成すること。
 - イ) 実業及び専門職業の道徳的水準を高めること。
 - ロ) すべての尊ぶべき事業の基礎として奉仕の理想。
 - ハ) 地元の地域社会の市民、商業、社会の繁栄及び道徳の高揚に対する全ロータリアンの積極的関心。
- ニ) 成功を助長するものとして且つ又奉仕の一つの機会として広範な交友関係の増進。
- ホ) ロータリアンの能率と有用性とを高める手段として、構想及び事業運営法の相互交換。

へ) すべての合法的職業は尊重されるべきであるという認識を深めること、そして各ロータリアンの職業を、社会への奉仕の機会を提供するものとして品位あらしめること。

- ④ 専ら全ロータリアンのみの使用と利益のために、国際ロータリーの徽章、その他の記章を創案し、採択し、保存すること。

1921年 以下の条項が追加された。

ロータリーの奉仕の理想に結ばれた、あらゆる国の実業人と専門職業人の親交を通じて国際間の平和と親善の推進に助力すること。

1922年

ロータリーの綱領は次の事項を鼓吹育成することにある：

- ① すべての尊ぶべき事業の基礎としての奉仕の理想。
- ② 実業及び専門職業の道徳的水準を高めること。
- ③ ロータリアンすべてがその個人生活、職業生活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること。
- ④ 奉仕の機会として知り合いを拓めること。
- ⑤ あらゆる有用な職業は尊重されるべきであるという認識を深めること、そしてロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するためにその職業を品位あらしめること。
- ⑥ ロータリーの奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって、理解と親善と国際間の平和を推進すること。

1927年

上記の第6条中の「ロータリー」という語が削除された。

1935年

ロータリーの綱領は、尊ぶべき事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある：

- ① 奉仕の機会として、知り合いを拓めること；
- ② 実業及び専門職業の道徳的水準を高めること；あらゆる有用な職業は尊重されるべきであるという認識を深めること；そしてロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するためにその職業を品位あらしめること；
- ③ ロータリアンすべてがその個人生活、職業生

活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること；

- ④ 奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

1951年

「Objects of Rotary」を「Object of Rotary」（これはロータリーの目標は、今まで複数あったものが、ひとつになったということの意味する）

1989年 日本語版を改訳

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある：

- ① 奉仕の機会として知り合いを拓めること；
- ② 事業および専門職務の道徳的水準を高めること；あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること；そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に奉仕するためにその業務を品位あらしめること；
- ③ ロータリアンすべてがその個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること；
- ④ 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

2013年

「Object」の日本語訳を「綱領」から「目的」に変更、かつ翻訳し直した。

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することである：

- ① 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- ② 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- ③ ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
- ④ 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

ロータリーのロゴマークの変遷



現在のロータリーのロゴマークはスポークが6本、歯数が24枚の歯車です。歯車はひとつでは機能しえず、相手があってはじめて、その機能を発揮できます。ロータリーのロゴとして深い意味を持っています。では、歯車の歯数は何故24枚なのでしょう。このマークが採用された当時、歯車として機能するには最少で24歯が必要であるとされていました。このロゴマークの考案者は、この事実を多分知っていたのでしょう。現在は新しいクラブ創設には25名のチャーターメンバー(創立会員)が必要とされています。(歯車は歯数が24枚以下でも、その機能を果たせる方法があることが今では分かっています。)

1905年: 最初のロータリークラブのロゴマークは、車輪のマークでした。

ロータリークラブ創設当時のアメリカでは、交通手段として馬車が使われていた時代です。回転する車輪は各会員の事務所で持ち回りで例会を開くロータリーにぴったりのシンボルとして、ロータリークラブのロゴとして採用されました。

1910年: ROTARY CLUBの文字と、下にリボンがつけられました。スポークの数も減っています。

1913年: 現在の歯車のマークになりました。当初は中心のホールに切り欠きはありませんでした。また歯車の歯は浅く、丸みを帯びたものでした。

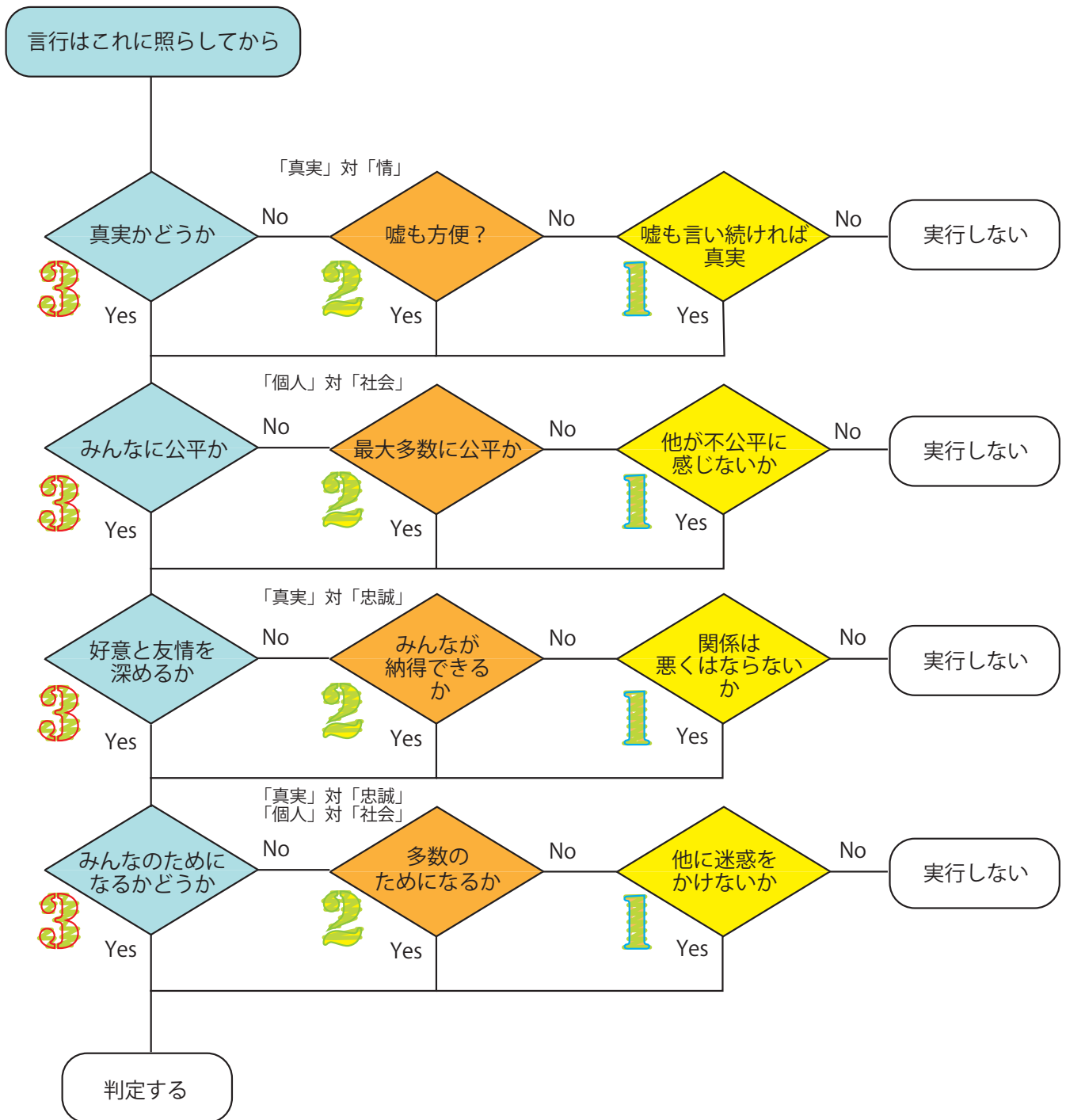
1924年: 現在のマークが使われ始めます。6本のスポークはシカゴ川とその支流を意味するYの字を2つ重ねたものといわれています。また、6本のスポークは6つの大陸を表し、24個の歯車は一日24時間を表し、世界中のロータリアンが24時間連携するという意味が込められている、という説明もあります。(どちらにしろ、これらのロゴの説明はすべて後付けのようです。)

2013年: 歯車のマークには「Rotary International」の文字が入っているが、小さいため遠くから識別が難しいとの理由から、歯車のマーク(今は「誇りのシンボル」と呼ばれます)の左側に「Rotary」の文字を入れ、公式ロゴとした(ページ右上)。

「四つのテスト」実践フローチャート

四つのテストを実践するうえでのフローチャートです。「Yes」と回答したときの列の点数(3点、2点、1点)を合計します。その合計点で実行するかどうかの判断の目安にします。

以下のフローチャートはあくまでもサンプルですので、条件や判断の分岐点に置ける質問事項は自分自身で考えてみてください。



- 12～10 : 実行する
- 9～7 : 問題点を解決後、実行する
- 6～4 : 再検討する



**Enter to Learn,
Go Forth to Serve**

入りて学び、出でて奉仕せよ

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

- 第1 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
- 第2 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
- 第3 ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
- 第4 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

付記)「ロータリーの目的」の4つの項目は、等しく重要な意味を持ち、また同時に行動を起こさなければならないものであるということで、RI 理事会の意見が一致した。(ロータリー章典 26.020)